

5月13日(土)、授業参観、学級懇談会、PTA 総会が行われました。生憎の空模様でしたが、コロナウイルスが感染症5類になったということもあり、昨年以上の保護者のみなさまが来校されました。午後からはキャリアセミナー、また広島西ロータリー主催のセミナーが行われ、校内は終日賑わいました。

さて、「G7 広島サミット」(19日~21日)が滞りなく終了しました。各国首脳がどこまで”ヒロシマ”を感じてくれたのでしょうか。また、広島市民は”核なき平和な世界の確立”を願うサミット開催でしたが、どこまでその想いが叶えられたのでしょうか。

生徒は開催期間を含め4日間のオンライン授業となりました。中間試験前を有効に過ごすことができたと思いますが…。(右の写真は、23日、桂さんの報告を受けて)



海外の大学で学ぶということ

5月22日(火)、大学合格の朗報が飛び込みました。えっ、この時期に?と思うでしょうが、海外の大学受験にチャレンジしていた昨年度卒業生がいました。海外の大学は9月入学となるので、この頃(6月頃)に合否判定がなされるということなのです。このたびの朗報は、桂 一葉さんが台湾の「国立臺南(たいなん)大學人文学院(学部)」に合格したということ。これは素晴らしいとしか言いようのない結果です。しかも「留学生日本人枠」という制度を使い、超難関と言われる書類選考にて合格を果たしたということです。翌日、桂さんから直接このたびのことについて話を聞くことができました。

どうして台湾の大学を選んだのか。いくつかのきっかけがあったのだそうですが、幼い頃からの経験から桂さんは話してくれました。ご両親に連れられて、ヨーロッパやアジア各地を旅行する機会が多かったそうで、自ずと海外へ目を向ける姿勢が育ったのだとか。中でもアメリカを訪れたとき、お母様の知り合いのアメリカ在住の中国人にお会いしたことが台湾をはじめアジアに関心を寄せるタイミングになったのだそうです。

特に台湾に注目するようになったのは、ハイテク産業において世界をリードする国であることに加え、特徴的な歴史に興味を抱いたということでした。台湾はもともと台湾原住民が永く暮らしていましたが、17世紀頃にオランダやスペインに統治され、1895年からは日本が統治する時代となり、第2次世界大戦を経て中華民国として成長を遂げている国。その歴史や平和のあり方について、台湾において、台湾の視点に立って学んでいきたいということでした。

さらに、台湾で学ぶことに意味ついて次のように話していました。「台湾は言論の自由や報道の自由など民主的で、しかも、人間開発の観点から

教育に熱心な国です。また、日本にいと日本側からの固定観念的な視点を崩せないこともあり、広い視点を持つためには現地で学ぶことを選択が最もふさわしいと考えました」ということでした。「あと、料理が美味しいことも」と付け加えていました。

桂さんのこうした想いは、中国新聞社のジュニアライター(お父様の知人からの勧めで、中学1年生から6年間)を務めたことも影響していると言います。広島において、平和の尊さをいかに伝えるべきかを考えながら取り組んだそうですが、中学3年の8月6日、世界の核廃絶が容易ではないことを身に染みたことがあったそうです。それは取材をしたイギリス人の「核廃絶は難しい。なぜなら、保有国と非保有国との核への価値観が異なるから。核保有によって平和を保てるという価値観は容易に崩せない」という言葉に解決の困難さを痛感したということです。また、人との出会い、その道の大人との出会いや関わりによって大いに刺激を受けたということも。だからこそ桂さんを台湾へと駆り立てることになったのでしょう。

桂さんは後輩のみなさんに、次のようなメッセージをくれました。「学校での学びは大切だけど、それ以上にいろいろな人と出会う機会を作って欲しいと思います。世代を超え、経験者に出会うべきです。そうした人との繋がりは自分を支えてくれると信じています。出会うときは緊張するけど、一歩を踏み出す勇気も必ず自分の力になると思います」。

桂さんは将来の夢(職業観)は未定なそうです。とりあえず大学院を目指すこと、また、インターンシップとして博物館で働いてみたいそうです。

海外大学に目を向け、外から日本を再確認するという学び方、これもありだと納得しました。多彩な生き方があるのだと実感させられました。